

high胎動

——森万紀子の『黄色い娼婦』——

Jason HERLANDS

本発表を「high胎動」と題したのは、森万紀子の昭和46年作品『黄色い娼婦』の中での、ドラッグ利用の現象を強調するためである。「high胎動」の“high”はラリっていることを暗示している。胎動は『黄色い娼婦』において繰り返し出てくるキーワードで、英語のhigh tideをもっているのである。今回の発表は私の博士論文の当初の探索の結果だが、まとまらない論とみていただきたい。本論文では、1970年前後の日本文学においての、ドラッグや麻薬による陶酔にかかわるテキストを取り扱った。作家論と違って4人の作家による5つのテキストの分析をしており、それらは最初は沼昭三の『家畜人ヤプー』という、未来幻想SMの長編、それから中上健次の初期の二つの作品『日本語について』と『灰色のコカコーラ』、村上龍の芥川賞作品『限りなく透明に近いブルー』、そしてここで取り組む、森万紀子の『黄色い娼婦』という、まとめて不思議な作品群である。

これらのテキストの中では、ドラッグの利用を描写する際、基本的な現実、リアリティの相対、反対の立場などの現実に対する議論として、どのようにして機能するかということを検討をしている。メロメロに酔った人の認識がある客観的事実の過程とかなり異なっても、この異なるからこそ主観的なものを否定することができるのであり、軽視することはできない。いわゆる客観と主観の「脱領土化」、境界の定めを壊す装置から、これらの作品を糧としてドラッグ陶酔の理論を構築していく。論文の中心は70年代前半の作品を取り上げる。ドラッグを描く作品の中に「歴史の認識」と「解放の可能性」という二つのテーマを掲げて理論を立てていく。たとえば『家畜人ヤプー』は、歴史を完全に書き直して人種差別を合理化するような未来を設定しており、マゾヒズムを抛り所にして恍惚的な解放が、「家畜化」によって生じられるように逆説的に書いてあるのである。あるいは中上や村上の作品は、大文字のHから始まるHistoryという共同の歴史を端っこから覗かんばかりの立場から語られるように描いている。森万紀子の作品も歴史に対してかなり否定的な立場として読まれるのである。『黄色い娼婦』の主人公は過去のことを幻覚みたいなフラッシュバックでしか意識しないように設定されている。主人公は、他人によって彼女を定義づけることに抗し、過去の物や歴史に無関心である。ここでの歴史とは、それは官僚的な書類から成立される記録だけでなく、個人的な過去の記録も含まれ、日々々々を区別するようなものを意味する。本研究では、共同体として歴史の真实性を、ドラッグ体験によって、またドラッグの認識によって改めて問い、歴史の陰部、つまり暗いところや汚い出来事などを、「陶酔」のレンズ越しに注目を浴びせられるようにまとめた。本発表はドラッグ入門に留まらず、更なる研究を必要とすることもいっておきたい。

作家と作品から

森万紀子はあまり知られていない作家である。上記の4人の作家たち全員がペンネームで書いているのだが、森万紀子も同様に、故郷さえ知られていない松浦栄子の筆名で、他の地方出身の作家と同様に東京まで流れて執筆活動を行ったのである。森は昭和9年、山形県酒田市生まれで、3人兄弟の次女であり、幼少期は裕福な家庭で育った。しかし、幼い頃に父親が亡くなり、高校を卒業してすぐ母親も亡くなったという事情が森を作家へと導いた。両親が逝去してから山形を出て神戸にしばらく行き、東京へ転居した。初めて自分の作品が活字になったのは昭和40年、『文学界』新人賞の上半期で佳作になった『単独者』という小説でであった。その時の新人受賞作は高橋光子の『蝶の季節』という作品だった。『蝶の季節』は、団地に住んでいる奥さんたちが、次々と蝶に変わる話である。蝶々に変わった女達がいよいよ夫に愛撫されるようになるという作品で、女性の欲求不満をアレゴリーを通して表現する仕掛けなのである。新人賞を高橋に奪われた森は、『単独者』に続いて『郷里』『密約』『黄色い娼婦』の作品を生み出した。しかし、いずれも芥川賞候補作となったが、受賞されることはなかった。因みに『黄色い娼婦』が出た昭和46年の上半期は芥川賞受賞該当作がなかった。

作品や対談から、森に対する印象はかなり孤立的であり、神秘的な人物像を築き上げようと努めた、ということが伺える。この為に、森に関する詳しく信頼性における情報は世の中に存在しないようである。平成4年に森万紀子の死が発表されるまでに、活躍の証として9冊の作品集を遺したが、作家本人が謎のままではこれらは解かれそうもない。

ここで『黄色い娼婦』という原稿用紙200枚程度の小説を短く紹介しよう。『黄色い娼婦』の初出は『文学界』昭和46年6月号であった。十頁目から載っており、紙面上の位置も、刺激的な題名も、読者の注目を引き付けるには十分であった。作品構造は3つのセクションに分けられ、最初は東京の病院や町の中、埼玉県境、電車の中の場面である。第二部は東北の串島くすじまの設定で、第三部は串島の管轄を含む阿木という港町の、警察の留置所での場面である。

主人公が「慎子」という名前なのだが、「マコ」と呼ぶことにした。チカコとかシンコとかマコトコとか言うこともあり得るが、この作品の第二部に主人公のフルネームが「森田慎子」と出てきて、森万紀子に多少似た名前のこともあり、主人公を「モリタ・マコ」と呼ぶことに決めた。批評家によると、作家と作中人物が重なるように描かれることはよくあるが、ここでも名前が重なるように思わせるための仕掛けがあると、読むことができるのではないだろうか。

『黄色い娼婦』の成り行きが錯綜していないので、他の難解な要素より先に成り行きを紹介しよう。上田三四二が作品をこう略して書いている。

慎子という娼婦が睡眠薬を飲んで、品川あたりのある慈善病院にかつぎ込まれ、そこで意識を回復するところから、始まっています。彼女は生活相談員の老人から千葉にあるホームに入るように勧められて、同意しますが、そのまま病院を抜け出してあてもなく歩き続け、男たちにあとをつけられたりしながら、埼玉県の県境まで行きます。そしてホテルに一人泊ろうとして追い出され、そこでフラフラと乗り込んだタクシーの運転手の話から、旅をする気になり、上野から夜行に乗って阿木という駅につき、そこから串島と

high胎動 (HERLANDS)

いう島に渡ります。島に渡ってからもそうですが、これらの主人公の行動はすべてなりゆきまかせの、ほとんど無動機の行動として描かれています。

申島で季節はずれの海の家泊まった慎子は、うさんくさい女として警戒され、また事実、金のなくなった彼女は、東京からの行商に来た男たちに浜で身をまかせるのですが、その夜彼女は島に死にに、渡ってきた婆さんの投身の現場に行き合い、ふところに入れる石を探してやります。この老婆は、慎子が夜汽車の中でたまたま同席した島出身の女で、若いころ申島にいて、漁師の相手をしていた過去を持っています。

慎子は自殺補助の疑いで阿木の警察に留置され、取り調べを受け、起訴されるかどうかの危うい際に立たされるところで、小説は終わっています」。

ここでは小説に起こる出来事が上手に省略されてまとめられている。にもかかわらず、この作品から出てくる重要な問題点の一つも触れていないことが極めて気になる。これは座談会の中から引用したものであり、議論前の略したイントロダクションに過ぎないのだが、これだけの説明では後の議論はわかりにくいに違いない。

問題点の一つは題名の『黄色い娼婦』なのである。これは興奮させるには十分なタイトルであるが、作品を位置づける働きとしては不透明なものである。まず「黄色い」という形容詞が何を指すかという問題がまず大きく存在し、決して明瞭ではない。作中では、「黄色」とはヘッドライトの灯りを描写するぐらいにしか使かわれておらず、夜を歩く女が車のライトに照らされて「黄色」という表現が使われたと考えられるであろう。「黄色い」が修飾するのは娼婦であるから、作中の場面を指すように考えてもいいだろう。また「黄色い」というと、人種のことを連想することも可能である。しかし、この作品中では、他の人種の色など全く出てこないで、人種を示唆される意味合いが成り立たない。困惑の「黄色い」である。

それから「娼婦」というレッテルも曖昧である。高井有一の批評にも指摘されるのだが、慎子イコール娼婦という方程式は確実すぎて論点を先取りしてしまうのである。「娼婦」は記号としてどんな働きを果たすかもっと検討したい。娼婦という言い方が、周りの人々の反応や発言を手掛かりとしながらも、彼女の行動によって成り立つか、あるいは逆に娼婦と思われるからこそ彼女がそれなりの行動するか、解決されないままである。ということで、慎子という人物が読者に紹介される以前に、題名によって彼女のことが無理に決めつけられていることを見逃さなくてもいい。主人公を「娼婦」として構築することによって、ジェンダーや性的受容性が露骨になり、行動や振舞いの表面的な根拠も晒される。しかし、「娼婦」という記号だけでは慎子の注目せざるを得ない認識が少しも解説されない。

親しくなれないテキストと主人公

多くの小説で語られる主人公の様々な特徴を、『黄色い娼婦』は欠いている。読者に隠されているわけではなく、むしろ意図的に慎子が確認できるアイデンティティの要素を包含しないのである。主人公が臍げに描かれている上、性別のほか彼女が対話者をほとんど識別しない。判明できないことが実に多く、会話部分を見ていただくとすぐわかるであろう。慎子のいわゆる

「なりゆきまかせ」という無動機の行動が、彼女の特異な認識から発生されることに気がつくと思う。

「まあ、島にきた理由は何でもいいや。旅行でも静養でも。なんにしよう？」亭主は聞いた。

なんでもいい。二人を見上げ、慎子は答えた。

「我々だって、なんでもいい」

しかし亭主は、滞在目的＝静養と書き込んだ。

「どうせ夏までなんか入れるもんかね。期間は半月と書いておく」

【中略】

「…ところでなんだ、あんたの仕事は」

「……」

「書く所は、あとはここだけだ。なんだね、職業は」

「きめて下さい」

「我々にわかりっこないだろう。自分のことだろうが」

職業を聞かれた時、今迄は、慎子は聞いたその人にきめて貰っていた。相手が、一番早く、彼女を納得する方法だった。

「きめて下さい」

床の上に腹這いになり、慎子は答えた。相変わらず床下から、胎動が突き上げて来る。その向うで、ありふれた職業一会社事務員一が書き込まれていた。(39-40)²⁾

こんな対話は可能であろうか？テキストの中ではこれが作中真実として受け入れられている。それで、慎子自身が共同のアイデンティティのマークを利用しないからこそ、我ら読者もある程度は、この主人公の生活についての確定した情報を得ることはできない。特異的な認識という、無我、つまり自分がなくて主観性が固定していない、即座の認識しかないという設定であるから、馴染みのある近現代小説の主人公と同様に見取ることは無駄である。会話文で全く、代名詞の「私」「あんた」とかを慎子は使用しない。慎子から相手のことを何うような対話は存在しない。テキストのナレーションが慎子の視点を離さないのだが、地の文で自他の違いが三人称に表されているのに、会話文となると慎子の身体や意思の枠組みが他人の印象のみによって構築され、対話が終わると共に消えて行く。このように慎子のアイデンティティを固定しようとするどの努力も失敗に終り、読者と主人公の世界がさらに乖離していく一方である。

慎子は代名詞を使わないだけではなく、動詞の使い方も特徴的である。どんな行動も彼女が何かをするというより、彼女がそういう行動になるというふうに書かれている。ここで、慎子と老婆を待つ見張り番の島の男の会話の一部を参考にしたい。会話は男から始まる。

「おもしろいかな。そんなふうな一日一日は」

「知らない」

「じゃあ黙っている間、何を考えてるんだろ」

「考えてない」

【中略】

「何日か島にいて、又、別の所に行って、そうして転々とするわけだろう」

「そう云うふうになればね」(48)

慎子には意見がない。慎子は何も知らない。慎子は何も考えない。慎子の行動のすべては、因果関係なく、「そう云うふうになれば」という論理である。

結果、その行動が主体性を説明しづらくし、慎子の姿勢が積極的な受け身と描写することになる。といって、慎子は明らかに動く身体でもある。ナレーションの視点のおかげで、彼女が意識していることや、知覚に応じたり気持ちを身体で感じたりするのも、読者に伝わってくる。慎子のあらゆる体験は次々と周りの人々と同化され、同化される内に体験の内容が空にされる。結局慎子は「ただ在るだけ」である。たとえば、睡眠薬を飲み過ぎて病室で一夜を過ごすとき、慎子にとって重要なことは、そのまま病室のベッドでその日を終わるか、出て行って他の休む所を探すべきかという素朴で根本的なことだけである。

慎子は振り返った。すでに警官も病室もそして町も、今まで自分を取り巻いて来た多くの事柄同様、異物感はなくなり、そこに自分はただ在るだけである。(15)

他の登場人物も読者も、慎子を理解する資格はない。一日のあらゆる糸が絡み合い束ねられて、慎子が存在する。流れと存在の循環が合体するまで、動きは止らない限り、意味を抱える。

何度も目を閉じ、そして開き、虚脱感の果てに出合う、いつもの眺めが広がるのを慎子は待った。動きが停止してしまうと、お互いに繋りを断たれたものとし、すべてが、そこにただ、在るだけになる。(55)

このシーンは描写されていないが、慎子が島で会ったラッパ吹きの男に犯されたと思わせられるような場面の直後にある。慎子は物を見るのではなく、「眺めを待つ」として描かれる。人物が機能を停止し、行動が止まると、また「ただ在るだけ」である。

このテキストはだからこそ「実存主義」と考えることができ、ここから、「存在」をドラッグの「陶醉」として解釈する。『黄色い娼婦』のテキストは従って、慎子が睡眠薬を呑み込んだときの波紋となり、その進展しない存在の形跡ともなる。慎子の感覚は肉体的なものや視覚的なものに限定されていない。ドラッグは内部と外部、身体と精神の連携を複雑にする。慎子の情報量が乏しい行動から彼女を理解するためには、ナレーションの描写だけに基づいて判決を下してはならず、読むにあたって彼女と同じく「トリップ」を辿るほかない。

慎子の認識が彼女の周囲から、ダイエジェティック世界まで外挿される。テキストは慎子とその認識のつながりを媒介するのだが、このつながりの特徴が断片化と脱親近化(defamiliarization)ということが最初から明らかであった。これは慎子の知覚の特有性のためでもあるが、ナレーションの機能の一つでもある。この作品のとても曖昧な、独特な言葉遣いを

ここで指摘したい。抽象的な名詞が動作動詞にくっついていることがテキスト中で目立つ。プロットや筋の曖昧な言葉が、圧倒されるほど多く出てくる。最初に現れる例は「周囲」という場所を表すありふれた単語だが、小説の二頁目だけでさえ3回も使われている。

頭を擡げ慎子は自分の周囲に開けた、どんよりくすんだながめを見廻した。
周囲に開けたながめから、再び自分だけが沈んで行く。
にわかには鮮明になった周囲が迫って来る。
ゆさぶられるつど、周囲はぐらぐら揺れ動く。
ふと自分を取り巻いていた周囲の一つが、今、欠け落ちていくのを感じる。
自分を取り巻く周囲の一角が又、崩れて行く。(11, 13-14, 16)

始めは「周囲」を「ながめ」とか、「取り巻く」ものとも考えることもできるが、「周囲」が動作しはじめると、「迫って来る」とか「崩れて行く」、「欠け落ちる」とか主人公の彼女が環境とはつきりしないかかわり合いを持つようになる。この単語を解明するためのキーが小説の内外にはないのである。読者としてこの「周囲」が大した意味を持たないことぐらひは分かる。周囲は家庭でも、社会でも、職業でもない。抽象的な言葉ではあっても、道徳みたいに社会的に抽象的なものではない。不安定なようでありながらも、慎子の生活の不可欠な物となっている。アイデンティティの概念というよりも、慎子の自己の構築は、この「周囲」によるものといえるのではないか。

「周囲」よりもっと不思議に使用されるキーワードは「胎動」である。「胎動」には多数の定義や意味合いがあり、『黄色い娼婦』では認識的なことも隠喩的なことも指すのである。身体の境界線を定義せず主人公の体の内部と外部をつなげるようである。³⁾『黄色い娼婦』の中での馴染み深い社会背景に住む読者からみると、慎子は常に断崖の縁に転げ落ちんばかりの生活をしている。しかし、作品の中に偏在する「胎動」のリズムは来たる危機を和らげる効果がある。「胎動」そのものが動作的な、認識できるものでありながら、その不安定が慎子の世界の唯一安定していることである。「胎動」が動いたり、息づいたり、崩れたり、音をたてたりと、感覚を刺激する。ここで作中の数事例を取り上げ、「胎動」の広漠たる利用を指摘する。

一転して周囲が灯の海になる迄、地面からつき上がって来る胎動の中を、行ったり来たりする。

足下に崩れ落ちた今の舞台が散らばり、夜の果てから押し寄せる地底の胎動が、それらを無限の闇に引きずりながら、更に残骸に変えて行く。

地底の胎動にもまれ溶け、胎動そのものになって行く眺めに出会うと、自分の人間としての形さえ、今は全く意味のないものに思われて来る。

この町の胎動の中に滲んだ体の跡が残って行く。

この胎動の中から、無数に生じて行くと思われたかかわり合いは何も生まれず、結局、この中に生じるものは、盛り上り、そして崩れて行く、波の呼吸作用だけのような気がする。(15, 23, 29, 47)

high胎動 (HERLANDS)

作中での定義ははっきりしておらず、ただ数十回繰り返されて用いられる注目的な言葉として存在する。連続的にこの反復が行われ、何人かの批評者は「これが作品の叙情的なことだ」、「これで『黄色い娼婦』は小説より散文詩として読めばいい」と主張している。しかし、「胎動」の重要な意義は、慎子にも、テキストによって読者にも付随的にそれを認識できるが、作中の他の人物には意味も知覚もない。慎子が「胎動」を感じて自分の居場所を確かめるが、「胎動」が、慎子を他人から疎外させることを本人は気がつかない。慎子は「疎外」や「他人」という意識でさえない。⁴⁾ だから慎子自身が「胎動」を判明する限りにおいて、時空の位置や社会政治の位置には意味がないのである。

同時代批評に陥る

『黄色い娼婦』を分析するにあたり、これまで書かれた批評や感想の文章が力になったのは事実である。私が『黄色い娼婦』を特に気に入っている点は、まず簡単明瞭であるが、見え透いたテキストではないという所である。地の文が判明しにくい視点を保持することも面白い。私の意見だが、ほとんどの読者事情からみて、慎子のような主人公に同感することはたいへん困難だろうと思う。それなのに、なぜか彼女のことは最初から好きであった。『黄色い娼婦』や森万紀子についての激しい批評を読めば読むほど、慎子という主人公が一層好きになったのである。今後高橋氏に伺いたいのだが、60年代に文学雑誌で批評される女性文学者は、かなり稀のようであったし、今でもそうかもしれない。森についての批評を読むと、彼女が作品を書くだけでも、男ばかりの委員会に提出して、評判を待機する作業そのものによって、自分が「娼婦」の役目を務めているということをおぼろげに思わなかったことはなかったであろうか。

森の作品に対する批評は大きく分けて3つの種類がある。第一は「当惑」または「憤怒」と名付けよう。これらの批評者は、作品が嫌い、作者も嫌いかもしれないが、作品に対して中途半端な厭みしか示さないのである。第二は最も多いタイプで、難解な所を説明する批評者である。森はいわゆる「内向の世代」に所属する作家だと言われている。実際に森の作品には絶対的な内向性があるといえる。なのに、内向の世代を語る記事のほとんどに、彼女の名前は取り上げられておらず、また森も当時の座談会には参加しなかった。「内向の世代」といっても世代外れの方が事実に近いような気がする。古屋健三の『「内向の世代」論』には、当時の作品の特徴といえる「批評者が批評するだけでなく、解釈の主役を演じた」ということを書いている。⁵⁾ 「内向の世代」の作家の批評者は「よく作家の伝記によって作家の善悪を決めるというより、批評を通して作家の動機や趣を説明して解明する役割が変わってきた」と述べている。森万紀子の批評者はこのように、わかりにくい作品を説明しようと努めたとは一応いえると思う。しかし、批評者の中には説明することに行き詰まり、まるで字数を埋めるだけのよう説明をするものや、無理矢理に独り言みたいな解釈をするか、結論を捨てぜりふのように付け加えて非難するかのよう、説明にならない批評をするものもある。第三のタイプは、少数派のグループだが、森万紀子を応援し支持するファンの批評者で、「わからない派」に森の作品を解説し、その価値を訴えるという批評家である。

特に、高井有一の短い書評に対して複雑な気持ちを抱くのである。批評文のほとんどが『黄

色い娼婦』の筋の説明だが、小説の意味についての軽い思索も深い観察も書かれている。高井のレビューでは慎子が実際に娼婦であるかどうかなど、テキストの矛盾を指摘し、また作品のわかりにくい言葉遣いにも触れる。高井は作品の難解な点を分析することによって、テキストの多義性が明らかになる。しかし、気になるのは、慎子という名前を一度も述べず、主人公を「女」とばかり言及する。「女の日々はかう現はされる。」「女は常に見てゐるだけである。」⁶⁾ 作中、慎子は常に三人称で名前と呼ばれている。正に、慎子が性的感受性のほか、「女」という社会的や政治的な特徴を体現しないため、題=パラテキストにて「娼婦」という札をつける訳であろう。それにしても、この素朴なジェンダートラブルには、書評の結ぶ兆しがみえる。最後にギロチンの刃を急に下ろすように、「私にとってこの作者の世界は、あまりに小さく、息苦しく、小説はもっと野暮でも拙劣でも、展かれたところがほしいと思わないわけにはいかなかった」と高井は書き終わる。⁷⁾

森万紀子の以前の作品の書評に比べると、高井有一の書評が割とバランスよくできているようである。平岡篤頼・寺田透・丸谷オ一・田久保英夫の座談批評では、もっと特定の判断を森の作品に下す。4人は森の文体が「わかりにくくて、望ましい効果はない」という点で共通し、厳しく批判する。平岡は『緋の道』という作品を読んで「虚しくて、痛ましい」と書き記す。⁸⁾ 『旅立ち』という作品に対して寺田は「乱れた病的な文体」と批判する。森の文体を丸谷の言葉では「だらしがない」と、はっきり判断する。しかし、誰よりも森万紀子の文体が嫌いなのは篠田一士なのである。怒りさえ表す。『旅立ち』を評価する場合、森が「困惑」や「淀み」という名詞に動作動詞をくっつけることを叫び、「こういう日本語というのは、僕には我慢ならないんだ」などと書く。こんな批評の立場からは、『黄色い娼婦』の「胎動」を許す気配を伺うことはできないのではなからうか。⁹⁾

それにしても、森は評論家の反応を、とても気にしたらしい。高橋氏の書かれた伝記によると、森は書評を個人的に内化した。「老作家が晦渋な作品を『わからない』と言うのは嘘で、率直に『つまらない』と言うべきである」というのは森の解釈である。¹⁰⁾ しかし、森は過剰に反応しすぎる。「わからない」という批評者は、はっきりと理解できなかったようである。まさに評論家として作品を理解しようとする方法が「ふさわしくない」とか、またどんな解説も無効になりそうだ、などの提案を甘受しないので、多くの読者が森のような文体や主人公を包裹する作品には反発したのであろう。

第二タイプの説明とする多くの批評家は、私にとって有益な場合が多い。というのも、このタイプの批評家は、森の複雑で難解な概念を正確にまた明確に解釈してくれるからである。たとえば、饗庭孝男は森の作家論を書き、森の主人公を「認識者」と呼ぶこととか、それぞれの主人公が孤立に死への独歩を「無縁仏」として描くことが、ある意味で私に解釈の基盤を与えてくれたと思う。¹¹⁾ 饗庭の批評の気に入るところは、彼の作家論は概ね森万紀子の作品を一貫して切り抜こうとする姿勢をとりながらも、自分が「胎動」などという言葉の不明な言葉遣いの解釈に「自信がない」というようなことも書いたからである。

『黄色い娼婦』を含めて森の多くの作品では、不明で、かなり異常な言葉が仕掛けてある。主人公の女性たち（すべて同一の「女」と、簡単に見なされることが稀でない）の立場も不明な、異常な仕掛けを帯びているといえる。批評するためには堅固な余地がない。『黄色い娼婦』の解

説を書こうとする際、普段前提とできるコンセプト、「人間は」「社会は」「自己は」などが解体されており、しかも解体の起源や続きが曖昧なままで解釈に抗拒する。なので、解説としての批評を読んで困ることは、作品の意味を探り、理解を求め、そして最後に一貫性を作り出すという傾向である。例えば、下に触れる上田三四二の全くポジティブな書評が、あげく過剰に解釈して意味を決めつけすぎてしまったように感じる。森の文体の嫌いな者が難航して読み終わろうとする一方、テキストの難しいところを綺麗さっぱりにして、作品や文体をわかりやすく判読しやすく、可視化できるようにするにも注意が必要であろう。森の作品を熟読して解説することを試みるのを、もちろん称賛に値するのだが、私は『黄色い娼婦』のこなれやすい部分や、分解できない文体の荒い肌が小説の魅力の一つだと思う。それ故に作品を説明するために、テキストを克服して制覇するような姿勢をとることなどを、できるだけ控えたい。

上田三四二の『黄色い娼婦』に対する輝くほどポジティブな評論を読んで、驚くほど悲しい感情を覚える。森はヨーロッパの実存主義の作家達と共通点が少しあるが故か、上田は『黄色い娼婦』をドイツの実存主義作家、マックス・ピカードの『騒音とアトム化の世界』と並べて解説しようとする比較書評を心掛けた。ピカードの著作中では機械をイメージにした魂のない近代都市が設定で、結婚や家庭などの魂の拠り所を失った人間たちを回復させようとするように書かれている。書評では上田は二つの作品を比べようとするのだが、結局、イデオロギーをはっきり示すピカードの作品で、ほとんど何もはっきりしない森の小説をそのまま説明しようとしてしまい、思わしい結果に結びつかない。ピカードは家庭の中の「灯火の親しみ」を近代都市の街頭の冷えた眩しさに対照するように、上田は慎子が黄色いヘッドライトに照明されることをそのままピカードの主張に外挿法的に適用するのである。そしてそれによって慎子には家庭がないので、近代都市の犠牲となっているという結論になってしまう。しかし、両作品のそれぞれの社会背景は著しく異なったものである。この比較書評では、『黄色い娼婦』は現代日本を背景に位置づけられるより、いかにも疎外されたピカードの創り上げた背景で評価されてしまう。

上田はピカードの作品から以下の引用を挙げている：「人間は性欲によって他の人々との連関から、いや自己自身の歴史からも引き離される。だから、性以外の何者でもない人間、つまり売春婦は、完全に歴史を持たないのである」（『揺るぎなき結婚』）。上田は続いて「慎子は、完全に歴史を持たない」と結論をつけた。確かに慎子が「歴史を持たない」という結論には、私はあまり抵抗がないのだが、それを証明するためには、更なる分析が必要である。慎子は歴史の概念を否定し、警察や病院といった公共機関の書類に付随する連続性を認めない。『黄色い娼婦』の主張は、ピカードの実存主義から遥か遠い内容を取り組むようなことも付加しなくてはならない。いろんな男とセックスをするからといって、慎子が歴史を持たない娼婦ということは、この小説と違った世界にある論理である。むしろ、逆の論理ではないだろうか。つまり慎子が歴史を持たないからこそ、言い換えれば歴史という概念に受け身的に背くから、平気でいろんな男たちと寝るのである。故に「歴史を持つ」資格を問うべきであろう。果たして慎子は「歴史」を持つ資格があるのか。『黄色い娼婦』では、「記録」という歴史の粒子が度々出てくる。その記録は必ず官僚的な機関や支配する層から沸き出る。今後詳しく検討するが、簡潔にいうと、慎子はどんな支配にもハカラズモ反発する。

以上の点で、上田の解説が少しもの足りないように感じる。さらに、書評では「胎動」という言葉を「自然」として還元したり、慎子という主人公を「作家の影」と呼んだりするような解説をする。森の言葉遣いを解明すること自体はとても有意義に思うが、新しい捉え方が必要であろう。上田は確かに『黄色い娼婦』が好きであったが、賞賛する書評にも多くの難解な点を認めなくてはならない。

ここで、先ず自身の読者として、あるいは分析者としての立場を確認したい。この作品が書きあげられて既に35年間も経過しているが、批評や分析の方法も、共に変わってきているのが事実である。私から見れば『黄色い娼婦』は、解釈されるのに抵抗し、辛抱を求める作品だという印象を持つ。従って自分の分析では、できるだけテキストから出てくるものを参考にして進んでいきたい。森万紀子の人生、森万紀子の性格、森万紀子が娼婦的であるということとは違うような方向の分析である。そのために「陶酔」の理論を利用して、慎子が睡眠薬を乱用したことから発展する作品の筋として『黄色い娼婦』を分析している。「陶酔」の理論によって、主人公の認識が、現実を構築する。またはその認識において現実に対する姿勢の支持ができて、そしてその構築された現実が、認識的な立場以外の根拠を必要としない、という分析の原理を設立する。つまり「胎動」を認識する慎子の現実を、そのまま現実として考えていくという定義から出発しよう。

紛らわしい解放のディスクール

作品に入る前に「解放」という言葉の意味を考えておきたい。60～70年代には「解放」を要求する団体が多かったためか、ありきたりな言葉になってしまった。アイデンティティの連帯カテゴリーでは、たとえ部落解放や女性解放があったり、地理的な集団では沖縄解放、ベトナム人民解放もあったし、そして大学などの施設の市場資本主義の圧力を免れるため、解放という言葉を利用して抗議やデモで訴えた。ニーチェの哲学が60年代になってとても普及していた故にか、概念的な「解放」として社会の道徳、現代社会の腐敗してきた価値観からの解放もディスクールのど真ん中であつたろう。この解放というのは、個人的・対人的な行動を制限することを的に、国際的によくセックスとドラッグの自由化を訴えたものである。「やりたい放題」の解放という感じで、決して継がれてきた保守的なものを尊重しなかった。

しかし解放というのは、その事実より概念の方が把握しやすいであろう。何かを解放するとすれば、そのものが束縛されていることが前提で、それに携わる権力を見つけなければならぬ地点から解放を探るようになる。現代の解放というのは、分散されている権力から求めるよりも、固定した分別やカテゴリー、社会のコンセンサス、意見の一致の、それぞれの力・影響からの解放を求めようとするを思わせる。グループや人が解放できたら、解放してどうなるのか、解放して問題のすべてが解決できたか、などと問わねばならない。解放の効果や波紋は何なのであろうか？

『黄色い娼婦』の主人公慎子は本来、本質・エッセンスを持たないし、神様も共同体も、物質文化も自分自身さえ崇拜しない。慎子の生きる時空は、完全に世俗化されている。慎子はただ存在する、「ただ在るだけ」のように生きていく。彼女は外部からのさまざまな圧力を気にせず、

故にあらゆる圧力が彼女に権力や抑制の印象を与えない。他の人物とは何の連帯感もないので、権力の影響に対して無効になっている。慎子が娼婦であるかどうかは別として、慎子は、または娼婦は、解放がいかにか可能なのであろうかと問いたい。この作品の設定では解放は可能なのであろうか。たとえば社会の織りなす人間関係を一切断ったら、解放ということは不必要となるのか、不可能となるか、どの視点から覗けば実現できるか、と私は問いたい。仮の結論としてしかたてられないが、『黄色い娼婦』にはある特定の解放が表現されているように思う。共同体を持続させる、または従属させるような作品中の社会では、実存主義者として「在るだけ」という心掛けは、必ず共同体に抵抗感を起こさせるわけである。『黄色い娼婦』のまとまりのない結論では、慎子は留置場に投獄され、その態度は出所してもせぜも変わらない。慎子は留置が全く気になりそうもなく、彼女が平気そうだと取調官さえ驚かされる。このことより、言葉通りの「束縛」から解放されたいということはなかるう。刑務所に入って平気だという主人公を理解するのはなかなか困難であろうが、慎子は自分の状態が、自分の行為の続きとしてしか認めないで、自分が生きている状況が東京であれ、刑務所であれ、ただ生きている形しか意識しないわけである。「周囲」が崩れていくと、過去の形が重なって、分別できない中立なものとしてただ消えていく。解放できてやっと幸せになるという因果関係が成り立たない。慎子が解放を目指すとしたら、それが「幸福」と「快感」との隔たりと考えられるであろう。解放がさらに幸福に導く方向と考えるとしたら、解放は慎子の事態に関係がないのであろう。しかし、解放の目的は快樂の探究という趣きであつたら、慎子の存在する認識的な次元は、おそらく束縛されない状態なので、慎子と解放、つまり快樂の探究は関係があるか、それは可能か、不可能かという問いが、無効になるのではないか。

『黄色い娼婦』の批評者、松本鶴雄と深川明子とも、慎子を人間っぽくない「人間の特徴が欠ける存在」として論を書かれている。両評論家の立場は、森万紀子の書く目的や、作家がどうやって主人公を描いたかについて注目しているのだが、作家の意思や考えについての推測は結論を得られず、推測のままですべて終わってしまうので、なかなか有意義な検討にならないように思ってしまう。二人の批評を参考にしよう。

『黄色い娼婦』において、作者は、さらに慎子から人間として寄って立つところのすべての基盤を剥奪した、慎子を、家庭や職場などが複雑に織りなす人間社会の人的関係から解放し、さらに、社会通念、道徳の非支配下にある状況を設定した。(中略) 慎子を単なる「存在者」として提示したのだが、あくまで徹底的に純化して、一切の基本的人権を慎子から奪い取って、作者が描こうとしたものはなんであつたのだろうか。¹²⁾

人間からすべての期待・希望・未来・生活上の欲望等々を剥離していけば、その地底に残されるものは対象を選択しなくともそれ自体で自立し、完結した性欲だけの屹立になるであろう。(中略) この作者は『黄色い娼婦』で根源的なく原性欲>のようなものを描こうと試みたに違いない。¹³⁾

慎子は人間や人間社会から離れた場所にいるように、深川も松本も書かれるが、これはあらゆる普遍的な人間ではないことを指摘すべきであろう。特に慎子は、現代都市における社会のさ

まざまな関係や義理から離れて存在しようとしているように見える。どの社会でもなく、却って東京と判明できる、親しまれない現代都市の中で、仕事や家庭の責任がなく、希望も夢もなく、そして幸福の追求という重荷も負っていない状況として描かれている。東京の人群や人波の中で、ただ身体の形だけとして平静に存在する。彼女の生活がどんな決まりまたは教訓に従属することなく、

風は北から吹いていた。そういう日は北に向かって歩く。向い風でのろくなった自分の体に、追い風で速度のついた男達が真直ぐ向って来る。(15)

慎子は大都会のリズムの一部として生きて、数多くの流れの中の一つの匿名の流れとして動く。彼女の趣旨というか、意義は受け身的で、社会的な関係が「正」としたら、慎子は「負」のエージェンシーを表すともいえる。ところが、彼女は負のエージェンシーしかなければ、彼女はどれほど解放されているといえるであろうか。共同社会のつなぎ縄を持たない慎子には、解放は見せかけに過ぎない。

その上、人間社会というのは、ただ抽象概念だけではなく、むしろ文化、道徳、時間と空間の携わる特定のものとして解釈され論じられるべきであろう。慎子が離れていても生きていける作品上の社会は、確かに後期資本主義の社会福祉共同体として構築してある。この社会が二分され、東京という参照される都会設定と、さらに曖昧な簡易的な地方設定に分けられている。都会の社会には市民の福祉が当然なので、たとえば警察や福祉を担当する局と慎子が睡眠薬を飲みすぎて目を覚ます慈善病院の設備が徹底してある制度になっている。その網の中で生活相談員という福祉担当者が雇われ、慎子のようにやっていけなさそうな人を助けようとする。警察官が慎子の態度を観察し、「得体が知れない」と言及し、それに対する慎子の反応がナレーションで述べられている。

おそらく、そうなのだろう。この男達の世界では自分は、そういうふうと呼ばれるのだと思う。別の人が別の呼び方をすれば、そういう人の世界では、自分はその別の呼び方になる。(19)

慎子のこのような無抵抗にあたっては、福祉制度の父性的な機能が働きかけだす。社会の主流で生活できない人を通常な生活を保つために、生活指導を行う献身的な施設ももちろん備えている。そういう「ホーム」(家庭を思い起こすような、家庭の温情のない施設の婉曲)は慎子が大都市のいわゆる悪影響から離れさせて、千葉に移して助ける施設である。生活相談員の話によると、このホームには「世間よりはるかに自由な雰囲気」がある。(23) 言い換えれば、東京が自由の正反対としてたてられ、「自由な雰囲気」を流れ者に贈呈するため郊外に福祉施設を建立する社会を「ホーム」が代表する。生活指導員は皮肉らずに発言するが、こんな官僚的に、婉曲的に定義された「自由」の下で、慎子にして解放とはどう意味し得るか、と思わない訳にはいかない。

ところが、生活指導を行う以上、何の生き甲斐があるかということは、実存主義者にはわか

らないであろう。慎子の空けたアパートを訪れた生活相談員の老人は「部屋を見に行っただけ、あれではなんのために生きているのかわからない。テレビもラジオもないし、新聞さえ取っていないんだから」(21)と見張番をしている警察官に話す。なるほど、社会にキチント生きている人はマスメディアに耽っているのが決まりの一つ、と示唆される。しかしこういうところに意外とこの作品を皮肉って精読しなくてはならないであろう。『黄色い娼婦』で現代社会というのが描かれる都度、慎子のように社会にかかわろうとする意思を示さない人に対して、共同体は執拗に身体と精神を支配しようとする。そのため、社会というのは、カルトみたいなものにみえ、カルトがカルト自身の美德にどれだけ侵害してもかかわりたくない人を解放させない、なるべく離れさせないというふうに描かれている。人は共同体を簡単には抜けられない、という社会批判として解釈できる。

他方では地方の設定は架空の故郷の串島と、陸の港町阿木である。地方は品川の混乱する人群と比べ、対照的なロケ地となる。しかし、慎子にしてはどんな差異も既に同化されている。串島に着くや否や、慎子は「新しい場所に辿り着いた時のいつもの感じが又、広がっていた」と考える。(37)しかし実際は慎子が、このようなところで人の流れとはなかなか一緒になれることなく、余所者の烙印を押される。上記の会話文は、「海の家」という国営民宿を訪れる際に発せられた慎子の言葉だが、さらにその後、慎子に個人情報が見られる場面がある。職業を尋ねられたら、慎子は「きめてください」としか答えないが、その後「民宿なので情報をあとで役場まで転送される」と言われる。ここで大都会の官僚制度が地方の爪先まで届いていることが明らかとなり、島と東京が類似しているとする慎子の視点が露になる。慎子の個人情報はすぐバレて、書類を見た他の島の人の内に慎子の噂が広がる。慎子の「会社事務員」と記された書類は嘘なのだが、後で島の人に「あなたは事務員の慎子ですか？」と聞かれる。ここで森は、そういう記録の疑うべき真実性、慎子のいわゆる「歴史」、が虚空だと当てこすっているのではないだろうか。

東京の病院と同様に、串島でも慎子が相変わらず「怪しい女性」として見透かされる。民宿のカミさんが慎子を見て、三年前に独身の女性が一人で島に来て地元の男と結婚し、連れ去って行ったという昔話を思い出して、「東京から来る一人の女は皆、おっかない」と結論する。(43)そして慎子の顔を見て「盛りのついた猫の目つき」と指して、慎子を性的な生き物として怪しむようになる。病室で警官と福祉の男が「緊張するような女じゃあない」(19)と慎子を嘲笑うと同様に、島では慎子がセクシュアリティの塊に煮詰められ、余所者として侮られる。

三月ごろが季節外れで、島には慎子と行商に来たラッパ吹きの男達しか客はいない。上野から北行きの汽車で島に迎える途中、東京から息子らに青森の住居へ連れて行かれる老婆が慎子の隣に座る。偶然にはその老婆は慎子の向かっている串島の出身であることが分かり、後で息子らの保護を逃げて生まれた島で死に帰ろうと計画する。阿木の警察と役場の情報によると、その老婆がある日、島に自殺しに戻ってくるように伝わり、慎子を含めて島全体が見張り番を交代でやるように頼まれる。慎子は遠くの大都会の共同体と異なった形で、島の住民たちと積極的に島のことを見守る様子が伺える。島は観光地なのだが、生活を乱すような余所者をすぐ疑う。慎子が季節外れで一人で旅行しているのを不思議がられて、民宿のカミさんの疑惑とともに島の若者の好奇心をわき起す。また行商に来ているラッパ吹きの男たちに対しては、その

疑いは全くなく、皮肉的にも、ラッパ吹き疑われるべきところも書かれている。慎子との臍げにした乱交場面の後、男達が肉体をもらった償いを考える。

「干場に行って、わかめと、干魚を抜き取って来い。東京に帰ったら高く売れるぜ。盗品を買ってくれる海産物商を教えてやってもいい」(57)

と一人の男が発案する。慎子はもちろん利益には何の興味もなく、彼女の存在には無駄遣いも剰余価値も決してないのである。ここで資本主義の欲望からは全く解放されているといえるが、共産主義を含めてどんな共同経済制度に当て嵌まることはない。

小説は架空なので、どんな偶然も許されるであろう。慎子はその夜、島に戻ってきた老婆に出会って、老婆が念仏を繰り返しながら石や土塊を袖に入れていた中に近づいていく。言われた通りに島人に報告せず、「慎子は屈んで、足先にさわった石を拾ってやる。」(56)自殺する老婆に慎子がなぜこんなことをするのか。これが一体エージェンシーといえる動作であろうか。慎子には、なるほど、実存の原理があり、受け身の論理を自分の存在につながると、地の文でそれを暗示する。

ふと、この中から、目の前に生じて来るものを考える。それも際限なく受けて行く。そうすると、それはそのまま、生きて行くことになった。受け入れることをしないで、黙ってやり過ごす。それは、そのまま死んで行くことになる。

考えてみると、他人に呼ばれた時、返事を拒む理由がないと同様、目の前に盛り上がって来るものを避ける必要はなかった。(53)

慎子はどんな連帯感をも負わせていないので、出くわす誰でもを受け入れる抵抗が本来ない。街頭で遇う男達と付き合っ、て、「娼婦」になる。自殺したい老婆に遇って、犯人にもなる。慎子が逮捕されて阿木の警察署で取り調べられる。その時、取調官は慎子の動機を知りたいという。それで、彼女の行動の動機こそが犯人の身分を決めるようになる。慎子がなぜ老婆に石を拾ってあげたかと尋問されるたび、反応が発言ではなく散文だけに表される。

それ以外、別のことは出来ない。慎子はそう思う。みな一定の方向に向い、ひたすら歩いて行く。ともに死に向かっている同じ土壌が鮮やかに見えていた。自分の進行方向も誰も逆にする事は出来ず、ただ黙々と流れ続ける無数の流れの中で、追い越して行く一つの流れを引き止める必要はなかった。(71)

慎子の世界観はそういう全員が一緒に同じ方向に流れている幻想から始まる。道徳を必要としないようなこの論理の世界には、自殺する老婆に石を拾ってあげることを躊躇う理由はちっともない。さらに慎子の時間意識も一方的な流れに限り、頭の中でこの老婆が単なる「追い越して行く一つの流れ」であり、つまり誰であっても関係のない者である。なぜ石を拾ってあげたのかとひき続いて聞かれると、「確かめたかったのだと思います」と自殺幫助の動機として成り

立たない応答をするだけである。

類似点があっても、あげく老婆と慎子のつながりが浅いことを指摘したい。遠藤周作の書評で森と老婆の関係を問い、森がこの老婆のことをもっと書くべきだったと書く。¹⁴⁾ そのようにしたら、慎子と老婆の差異が更に明らかになったろう。昔の老婆は漁夫たちの相手になって歌を歌ったりして誇りを感じて稼いでいたが、表面的に慎子と重なる部分は、肉体商売をしていたという点だけである。年老いて親戚に転々と預けられてきた当時に、老婆は自殺の方を積極的に選ぶ。老婆は息子たちに青森まで連れて行かれるが、自分の行きたいところと違って、はっきりと息子らに向かって「どうせ死ぬならお前たちのところなんぞでなく、串島で死ぬぞ」(36)と怒鳴る。慎子の場合は、何のために行動するか老婆のように明白ではない。生の流れで一向に死へと向かうと思う慎子は、老婆と真逆の意義である。老婆には、生と死が循環的で、自分の意思によって自殺する能力を備えつけている。生と死は一生苦勞したから同じ場所で起こるべし、という論理を働かせる。

しかし、慎子の存在にはこういう動機付けはなく、受け身の原理のもとで実存するしかできない。主人公として慎子は意図的に自殺するエージェンシーさえ持たないので、死への道を通り続けるにしても、それに目的や意図があるか否かは一切結論できない。慎子は前の夜に一緒に過ごした男から睡眠薬をたくさんもらうが、睡眠をとるためではなく、もしかして食欲をなくすために食べたか、慎子は徹夜、続けて薬を飲み、慈善病院で目覚めてしまう。作品の世界では、社会が慎子の死に対する姿勢を許すことはできない。

ラリる日々を

本発表で『黄色い娼婦』に表れるドラッグ、麻薬、薬をいうのだが、まさしく作中、薬みたいなものは睡眠薬に限る。睡眠薬にドラッグと名付けてふさわしいのには、3つの理由がある。まず慎子が薬を睡眠をとるための正しい用法ではなく、ただ乱用してただけなのが一つである。次の夜まで、「体の隅に、昨日の薬の濁りがまだ残っている」(32)と慎子は感じ、ラリっているように感じる。次は、周りの社会風景から離脱された主人公が薬を乱用するのと、そして幻覚を見ても独特の現実を体験したりすることも、ドラッグの理論からみて興味深い展開である。最も大事なことは、この小説にみえる「ドラッグ的な効果」というものである。つまり具体的な薬物と、その麻薬の効果の因果関係がぼやけて曖昧なところにある。ドラッグは自然のものではなく、人間によってカテゴリーとしてつくられたものである。だから主人公は薬を飲んだからといって、また飲んだという事実にもかかわらず、主観性がむちゃくちゃで、ドラッグ効果的なリアリティを解体する設定で書かれている。このドラッグによる解体、そして身体と精神との解体は、客観的観察と認識との解体まで及ぶ。この意味で『黄色い娼婦』はドラッグ理論のディスカールに直接かかわると主張したい。もちろん麻薬の種類は多数ある。第二次世界大戦の後、占領下の日本では、戦時を通して大日本住友製薬の造ったヒロボンの乱用が普及し、無頼派の作家達などに広い人気を集めた。本多秋五によると、そのころ東京の知り合いの中で覚醒剤を一回も使わなかった人を知らなかったという。¹⁵⁾ 占領軍の下で麻薬取締法が発行されたが、麻薬の分別は合法と違法の二つにしか分かれていなかった。1960年代に入ると、

厚生省麻薬下の専門家、久万楽也は活躍し、麻薬課長から麻薬参事官まで昇進する一方、麻薬についての本を数冊書かれ、1962年10月9日に、「厚生省の麻薬Gメンが初動向」¹⁶⁾する世の中になった。久万の書物には、麻薬の恐ろしさ、中毒の惨めさ、道徳の足りない人の誘惑しやすさ、そして麻薬に関連する犯罪が、鮮やかに記されている。専門用語のない、ドラマチックな怖い話を通して、麻薬の種類を分別できなくしてしまう。

『黄色い娼婦』において、自分の発展していくドラッグ理論に最も適用してみたいところは「胎動」というキーワードに対してである。肉体的と精神的な存在が「胎動」という不可解なものに収束されている。「胎動」は単に兆しの抽象された概念ではなく、むしろ慎子が認識して居場所を縁取るような存在するプレゼンス、または勢いなのである。慎子が会話文で「胎動」について発言することはなく、必ず彼女の視線を通して三人称で語られている。この言葉の何十回もの再発は、「突き上ってくる」やら、「置き去りにされる」やら、変わっていく「胎動」を認識して、認めたりすることが何より重要である。テキスト上では「胎動」が全く細かく、小さく簡単に規約されるものではない。解釈しようとする、もっと把握しにくくしてしまうだけであろう。

「胎動」というのは、ドラッグのトリップで視るものに、とても類似する。たとえば「胎動」は、身体感覚認識につながっているのに、身体の外側にあるように現れる。「胎動」の認識は身体と精神の間に根づいており、自我をボコボコと置き換えて、超自我を無意味にしてしまう。「胎動」も麻薬幻覚のように主観性の脱領土化の例で、自我、というより意識の境界線の削除と引き直しの繰り返しであるともいえる。

作中、「胎動」という単語がやたらに単独で出てくるが、ほとんどの「胎動」は、町や海、大地、島、地の果てという地理的な名詞にくっ付けられてある。これらは慎子の認識により変移する水平線であり、幻覚の時空を慎子の感覚に打ち込ませる表面とでもいえる。周りの人々が人間社会で共同生活を統制される代わりに、慎子にはこの「胎動」が、そういう境目や暗号を送り届けている。つまり、共同体の代わりに「胎動」がある。「胎動」が慎子に提供するのは、仮定的な構造に過ぎず、そしてそれが故に意味をなすことがなく、というよりありとあらゆる意味を解体するかもしれない。

地底の胎動にもまれ溶け、胎動そのものになって行く眺めに出会うと、自分の人間としての形さえ、今は全く意味のないものに思われて来る。(23)

だから、「胎動」は真実などを代表するのではなく、むしろ「真実の不在」を示すのである。この読み取り方では、「胎動」が「陶酔した装置」として考えられる。この装置は、認識と外界と代わる代わる変調するもので、認識と外界のどちらにも優位を占めさせないものである。この変調する装置が因果関係を否定して、効果や結果だけを重んじるのである。原因の論理が無関係とされ、そしてこの「胎動」は中毒になりやすい薬物のように、「胎動」の効果が「崩れていく」とともに、さらに新しいブツが手に入るように、探し出す必要となる。

薬に一回触れただけでも、『黄色い娼婦』が陶酔論の読み取りを招くであろう。この作品が、薬とともに描かれているので、さらに麻薬と同様な現実を解体する、幻覚っぽい認識を提供す

るので、「胎動」とドラッグの相似関係を認めるには異論はない。『黄色い娼婦』では現代社会がカルトのように描写されている。そのような社会においては、慎子の立場はエージェンシーのあるセルフ、自我を志すことはないといえるであろう。安定していない主体・主観が、共同体にその自我を構築するからなのである。主体・主観の「subject」という単語はサブジェクションというラテン語の語源なのだが、つまり服従・従属・屈伏、他のものの下に自分を投げるという意味である。主観を構築する主体化は「自分を下に置く」という意味合いを忘れてならない。

『黄色い娼婦』の慎子は受け身に取り巻かれる事情を受け入れるが、自分を屈伏する主体に変えさせることを、どうしても受け入れない。何度も出くわす人々が、彼女の主体性を構築しようとする。以下は慈善病院にいる時、生活相談員の老人と警官が慎子についての書類を読みながら彼女の取り扱いを話しあうシーンである。

老人は持ってきた書類を揃えながら、慎子を見た。

「緊張するような女じゃあないですよ。この女は」

「とは、僕も思うがね」

笑いあう二人の男の姿が、廊下側の硝子戸に写った。老人は書類を警官の前に広げている。

「この女の今の状態が、書かれているこの通りだとすると、今日のホームの事は単なる事故だとしても、いずれまた自分から同じことを繰り返す可能性は出て来るわけだな」。(19)

この場面では、書類が慎子の今までの生活を描く唯一のものとして登場する。福祉の老人と警官は慎子を知るために書類を完全に頼るわけである。自分の待遇が話されている場面を慎子は超然と見る。「この二人により盛んにつくられていく自分を、慎子は眺めた」。(20) 慎子は東京を去ってからもまだまだ書類によって主体化されようとするのである。たとえばそれは申島の民宿に泊まるための規定でもみえる。書類によって、さまざまな島人が書類に眼を通して彼女の名前など、偽造した欄まで覗き、彼女を知ろうとする。

さらに慎子は老婆の自殺幫助の疑いで拘置される際、東京から前と同じような書類が送られてしまう。書類が届く前に取調官が慎子を見て、書類でわかるような情報以外のこと、つまり精神的なことが、特に犯罪の原因ではないかと疑う。「この女の中身が問題になるだろうね、結局、すべてが、そこに行く」。(67) しかし書類が東京から留置所に届いてから、書類だけが中心となり、自殺幫助の容疑が忘れられる。

激しく渦をまく濁流を見た気がする。その中から徐々に、机の上に積まれた書類と、それを一枚、一枚、慎子に向かって差し出す取調官の姿が現れて来る。

慎子は立ち竦んだ。

一日が一枚ずつの紙になり、おびただしい自分の過去がうず高く積まれていた。それらと向かい合っていると、再び濁流が目の前で激しく渦を巻くのを感じる。(74)

書類によると、慎子は慈善病院や品川の警察署や千葉のホームからの「逃亡者」だと記され

ており、取調官が彼女を「おたずねもの」と呼ぶ。しかし慎子にとっては、この書類が自分の過去を固定した形になっている。

相変わらず慎子は書類の前に立ち続けた。過去の自分の日日が、濁流と共に次々と目の前に流れ着く、その音に聞こえる。(75)

つまり、警察にとってこの書類は慎子のことを描写するだけではなく、実際に慎子をつくりあげ、構成させるものである。慎子にはこの書類はただ彼女の認識の流れに乗って同化されるのである。それに、書類を含めた流れは濁っていくのも面白いであろう。警官から見ると、さまざまな集まった書類が証拠として慎子の留置期間を長くするのだが、慎子は冷静に見て、「胎動」が再生されるように思う。

伸ばした手で、彼女は机の上の書類をめくった。一枚一枚、読み上げられて行く。すでに通過し崩れた周囲の光景が救い上げられ、再び組み立てられて行く。ふと、終りのない地上の膨大な胎動の中に、次々に再生され、浮上して来る自分の過去を慎子は眺めた。

このように消極的に眺めてばかりいる慎子は、エージェンシーを認めることは不可能であろう。しかし、慎子には「胎動」の認識を起動させ、主体化に抗するような装置がある。主体化させられないということは、書類による彼女を囲もうとする公の歴史記録に深く関連しているであろう。書類では慎子の過去は一日一枚ずつ固定化されるにあたって、彼女にとって、それは外的な物体で、「終わりのない地上の膨大な胎動」と同化してゆくわけである。慎子の過去は原因のない効果となり、彼女は主体のない物体として成立される。

慎子が「娼婦」であることは、社会経済的な準諷刺として考えられる。慎子には社会的な使用価値がない。政治的な連帯もない。共産主義者にも資本主義者にも役立たない。物資を蓄積しないし、共同体をも敬わない。慎子には肉体価値しか持たないので、娼婦として社会の周辺を辿らせてしまう。しかし、当時の麻薬濫用者やヒッピー達の主張と同じく、結局、社会圏の方が滑稽に見える。文明社会の様々な器官が広い網の支配を正当化しなくてはならないが、この作品では慎子に疎外的な価値観を強いて受け入れさせようとする形となる。慎子はその支配を巧みに避け得るが、主体化の他方には耽美的な忘却の淵しか見つからない。

注

- 1) 佐々木基一・遠藤周作・上田三四二「創作合評」『群像』1971年7月号、295-296頁。
- 2) 森万紀子『黄色い娼婦』『文学界』1971年6月号、(数字は初出版の頁を表す)。1971年9月に『黄色い娼婦』の作品集(文藝春秋)にも収録。
- 3) 恐らく、文字通りの意味としても皮肉のために利用されているであろう。その場合、慎子が区別しない数多くの男とセックスするが、従って彼女の認識がなかなか産まれてこない「胎児」の動きにつないでいるようにみえることとなる。社会面には慎子のセクシュアリティが完全に無効なので、慎子に接近する社会の人々には、その認識の中で動いている「胎児」が全く不明瞭であろう。が、どんな包括的な解説と同様に、これも行き詰まりで終わる。

high胎動 (HERLANDS)

- 4) 高井有一「鎖された世界：森万紀子『黄色い娼婦』」『早稲田文学』第7次，1970年11月，87頁参照。
- 5) 古屋健三『「内向の世代」論』慶応義塾大学出版界，1998年7月。
- 6) 高井有一「鎖された世界」，86 - 87頁。
- 7) 高井有一「鎖された世界」，88頁。
- 8) 平岡篤頼「冷たく熱い戦慄」群像』1976年10月号，458 - 459頁。
- 9) 寺田透・丸谷才一・田久保英夫「創作合評」『群像』1972年7月，276 - 291頁。
- 10) 高橋光子『「雪女」伝記：謎の作家・森万紀子』潮出版社，1995年11月，143頁。
- 11) 饗庭孝男「幻想なき文学：森万紀子論」『早稲田文学』第7次1972年5月号，78 - 91頁。
- 12) 深川明子「森万紀子『黄色い娼婦』の慎子」『国文学 解釈と鑑賞』1976年9月号，148 - 149頁。
- 13) 松本鶴雄『「黄色い娼婦」森万紀子』『国文学 解釈と鑑賞』1973年5月号，99 - 100頁。
- 14) 佐々木基一他「創作合評」，299頁。
- 15) 本多秋五『物語戦後文学史』新潮社，1966年，56頁。
- 16) 家庭総合研究会編『昭和家庭史年表』河出書房新社，1990年7月。

